



一 解 說 一

作例解説と本書の活用法

●乗炬法語の型

乗炬の意味について、佐橋法龍師著『引導法語作法入門』（長国寺刊）に、次のように説明されています。

「*乗炬・火葬のとき、導師が松火を手にとって遺骸に点火すること、下炬（下火）ともいう。またこのときに唱える法語が乗炬法語で、下炬（下火）法語・引導法語ともいう。ただし尊宿に対しては引導法語とはいわない」

乗炬法語の型（形式）は引導法語と同じく、多くは次の七つの部分で構成されています。

- ① 頌 七言絶句 左記の平起式か仄起式のいずれか。○は平字、●は仄字、●は平仄を問わない。◎は押韻。
平起式Ⅱ起句の二字目が平字となる。

(起句) ○○○●●○○◎ (承句) ●●●○○●●◎

(転句) ●●○○○○●●● (結句) ●○○●●○○◎

仄起式Ⅱ起句の二字目が仄字となる。

(起句) ●●○○○○◎ (承句) ●○○●●●○○◎

(転句) ○○○●●○○●●● (結句) ●●●○○●●●◎

- ② 称号 恭惟 新般涅槃 当山○○○世「 大和尚 品位(真位)
③ 八字称 ○○○●○○○○◎

- ④ 隔対と直対 (組み合わせ方・句の字数・対句の数は任意)

□□○ □□□□□ ●
□□□ □□□□□ ◎

□□□□□ ● 直対

□□□ □□□□□ ○
□□□ □□□□□ ◎

□□□□□ ● 直対

- ⑤ 漫句(散文)

□□□□□……………□□□◎

(例…上來は是れ……………正与麼の時、如何…………)

- ⑥ 一字関(嘆・露・喝・参・咄・看・躰など任意。又は少し間をおく)

□□□□□ □□□□□ ◎

- ⑦ 脚句(七言対句)

〔作例解説と本書の活用法〕

また大きく分けると、頌、腹（八字称・隔対と直対・漫句）、脚の三つになります。この内、特に頌と腹の表現形式について実例を挙げて説明します。

●頌

葬送の法語の心得として、古来から「仁（徳）・死・哀・活・奠」の五要が大切であると説かれ、頌・腹・脚のどれかに表現されているのがよいと言われています。

また秉炬法語の頌は、主に次の内容のいずれか、またはいくつかが織り込まれて表現されています。

- (1) 死去・哀悼の意、また本家郷に趣く境涯を、具体的な情景（季節）に託して述べたもの。
- (2) 徳行、末後の活消息を中心に述べたもの。
- (3) 僧名（道号・法諱）や寺号などを入れたもの。
- (4) 宗乘に重きを置いて述べたもの。

近代の実例では、この(1)～(4)はどのように表現されているでしょうか。

花前拂袖別春風。
烟鎖閻浮古梵宮。
末後牢關留不駐。
泥牛沒影太虛空。

花前に袖を払って春風に別る
閻浮を煙鎖す古梵宮
末後の牢關留むるも駐まらず
泥牛影を没す太虚空

右は北野元峰禪師作。上平・一東韻。(1)の末後轉身（遷化）の境涯が春の景気と共に詠まれています。（用語の意味は本書24頁参照）

有爲念々利那移。
百歲光陰黍一炊。
蝶夢未醒春已謝。
千山替得綠蓑衣。

有爲念々利那に移る
百歳の光陰黍一炊
蝶夢未だ醒めずして春已に謝る
千山替え得たり緑蓑衣

能仁俊巖師作。上平・四支韻。(1)の轉身の消息が、初夏の景色と共に詠まれています。（本書30頁参照）
本書の「頌」は、季節の別と四季兼用（「兼」と記す）を本文の上に示しています。

八十三年垂釣竿。
婆心片片碎心肝。
藏舟夜壑荒涼晚。
蕭々悲風滿地寒。

八十三年釣竿を垂れて
婆心片片心肝を砕く
舟を夜壑に蔵す荒涼の晩
蕭々たる悲風滿地に寒し

伊藤道海禪師作。上平・十四寒韻。起・承句で(2)の徳行が述べられ、転・結句で(1)の轉身・哀悼が表されています。

不退願輪拓祖田。
化門長八十餘年。
因縁時節奈生命。
遺業任他光績鮮。

ふたい がんりん ぞでん ひら
不退の願輪 祖田を拓く
けもんなが はちじゅうよねん
化門長し 八十余年
いんねんじ せつ せいめい いか
因縁時節 生命を奈んせん
いぎょう せいしゅあらば
遺業は任他あれ 光績鮮やかなり

高階瓏仙禪師作。下平・一先韻。起・承句で(2)の徳行が述べられ、転句で(1)の死去、結句は末後の活消息が示されています(本書59頁)。

格外家風七十年。
海雲山上玉華仙。
一朝高奏還郷曲。
裂破虚空獅子絃。

かくげ かふう しちじゅうねん
格外の家風 七十年
かいうんさんじょう きやくげ せん
海雲山上 玉華の仙
いちこうそう げんきょう くるま
一朝高く奏す 還郷の曲
こくう れつぱ しし げん
虚空を裂破す 獅子の絃

北野元峰禪師作。下平・一先韻。「海雲山」は山号、「玉華仙」は僧名(玉仙和尚)の縁語。起句で(2)の徳、承句で(3)の固有名詞、転結句で(1)の還郷の消息が詠まれています。(本書54頁)
右の実例を参考にして、他の表現に変えて作成することができます。左はその一例。

□□家風□十年。
□□山上□□禪。
一朝高奏還郷曲。
又向何時結化縁。

(随意) □□の家風 □十年
(山号) □□山上 □□の禪
いちこうそう げんきょう くるま
一朝高く奏す 還郷の曲
また 何れの 時に 化縁を 結ばん

起句の□□は、和尚の徳・性格などを入れます。綿密・温厚・快活・閑寂・誠直・重厚・穆穆・独脱等。
結句は、本書の頌(結句)から、●●○○○○(一先韻)の平仄の句を任意に選ぶことができます。たとえば、
(例一) 轉錫那方戢化權。
転錫して那方に化権を戢む
(例二) 運歩劫前破大千。
劫前に運歩して大千を破す
(例三) 護法功勞今孰傳。
護法の功勞今孰か伝えん
(例四) 法壽無量種智圓。
法壽無量 種智円かなり

なお他の句に代える場合、同じ韻字や、同字(「堂々」「蕭々」などの畳字を除いて)は使わないように注意します。

絶學無爲閑道人。
不除妄想不求眞。
一朝驚殺閻浮夢。
遊戲他方世界春。

ぜつがくむゐ かんどうじん
絶學無為の閑道人
もうせう のぞ
妄想を除かず 眞を求めず
いちちやう えんぶ ゆめ きやうさい
一朝閻浮の夢を驚殺して
ゆげ たほう せかい はる
遊戲す 他方世界の春